

背景

昭和62年（1987）7月、徳島県三好市山城町の国道32号で土石流が発生し、車両4台が被災しました。この災害は、トラック2台が土石流の直撃を受けて吉野川に転落、乗用車1台は路上に埋まり大破し、ライトバン1台は路上を流され川側のガードレールで止まり吉野川への転落は免れるという災害でした。しかし、車両運転者等の適切な避難行動により、奇跡的に人身被害は発生しませんでした。

アクセス 災害現場付近（国道32号の距離標81/8）

- JR大歩危駅より南南東へ直線距離約3km
- 三好市山城町下名
- 緯度経度 北緯33度51分13秒，東経133度47分14秒

昭和六十二年（一九八七）に国道三二号で土石流に遭遇した人の体験談です。
七月一四日午後九時頃、三好市山城町の国道三二号の現場付近一帯は、梅雨前線による集中豪雨のため土砂降りでした。

高知から高松に向かって走行中のライトバンが、豪雨により山側斜面から流出していた土砂にタイヤを取られて脱出できなくなりました。同乗者が車外に出て後続車等に応援を依頼し、これに応じた後続のトラックと対向車線を走行していた乗用車及びトラックが路上に停車し、運転者や同乗者が救出応援に向かい、車両を押そうとしていました。

その時、乗用車の運転者は、路面を流れていた流水の色が赤く変わり、斜面の上部でバリバリという木々が裂けるような音が聞こえたため、とっさに危険を感じ、全員に池田側に逃げるように指示をしました。すると、その直後に山側からの大量の土石流が上り線側のトラックを直撃し、トラックは吉野川に転落し、ライトバンは運転者が車内に残されたまま土砂流により路面上を滑走し、川側のガードレールで止まり、運転者は脱出しました。

車両四台の搭乗者（計八人）は、車両を現場に残したまま現場を離れ、山城町駐在所に災害発生を通報しました。その後、次の土石流が発生し、下り線に停車していた乗用車とトラックを直撃して、乗用車が埋まり、トラックは吉野川に転落しました。

流水の色の変化と木々が裂けるような音に危険を察知できたことが、車両四台が被災した大災害にもかかわらず人身被害が皆無という奇跡的な結果をもたらしたのです。



明治・大正

背景

明治25年(1892)に那賀川上流の現在の長安口ダム貯水池付近にある高磯山(那賀町)が崩壊しました。崩れた土砂は那賀川の河床から110mもの高さとなり、那賀川をせき止めました。その後、土砂にせき止められていた川の水位が上がり、とうとう水が一気に下流を襲いました。上流で土砂が那賀川をせき止めた様子や土砂崩壊の情報は、飛脚や半鐘などにより下流に伝えられていました。この話は、当時の那賀川最下流の阿南市での様子を描いたものです。

アクセス 楠木神社

- 持井橋より南東へ約2km
- 阿南市中大野町
- 緯度経度 北緯33度56分07秒, 東経134度35分28秒



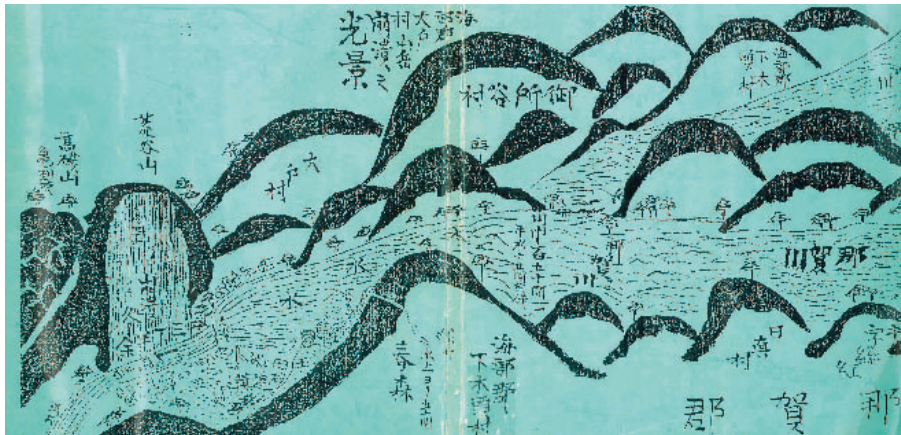
明治二五年(一八九二)八月一日、降り続く雨のため、那賀川の水かさはどんどん高くなっていきました。高いところにある屋敷の家でも、一軒一軒が孤立してしまいました。

ところが、午前八時頃、あれほど上から押し寄せていた那賀川の水が引いていきました。人々は、なぜ那賀川の水が引いていったのだろうと心配になりました。情報は飛脚によって伝えられました。水が引いたのは那賀川上流の高磯山が崩れて、那賀川をせき止めたため、せき止めたところより上流は湖になっている、木頭、坂州は水の底など、うそとほんとの情報が入り混じって大騒動になりました。

上流の土砂はいつまで那賀川をせき止めているのだろうか。大水が流れるようになったら、上の村から下の村に半鐘を打って知らせることになっていました。いつ半鐘が鳴るのだろうか。一日一日待っていました。

ついに、その日が来ました。八月四日午後二時、濁流が村々を飲み込む勢いで襲ってきました。あたり一面、泥の海になってしまいました。阿南市中大野の楠木神社には、大水から逃れるために三人がよじ登ったと言われる楠が今も残っています。

八月五日の午後七時になって洪水は引いていきましたが、後には泥をかぶった稲、野菜、牛馬のえさの雑草が残りました。その年、牛馬の餌にする稲わらは、水で洗って食べさせたとされています。



▲高磯山の大崩壊の絵図
(西崎文庫蔵書「諸県変シ全」)



平谷八幡神社▶

背景

明治25年(1892)7月25日、台風による暴風雨で、那賀町大戸の高磯山(611m)が大きく崩壊しました。流れ出した土砂は那賀川を越えて対岸の春森まであふれ、那賀川の河床から110mの高さに達しました。この土砂によって那賀川は流れをせき止められ、ダムとなってしまいました。せき止められてから二日後、とうとうダムとなった箇所が決壊して、大水となって下流を襲いました。この話は、高磯山よりも上流にある平谷の薬師堂がせき止められた水によって移動したときの話です。

アクセス 妙法寺薬師堂

- 平谷小学校の南すぐ
- 那賀町平谷
- 緯度経度 北緯33度47分39秒, 東経134度18分07秒



高磯山の大崩壊によりせき止められた那賀川の水は、上流の辺り一面を水没させました。平谷村(現在の那賀町平谷付近)にある妙法寺も水の底に沈んでしまいました。妙法寺の住職は本尊の観音様や薬師如来様を抱いて、命からがら上ノ内まで避難しました。しかし、建物まで持っていくわけにはいきません。本堂や、お堂など、古くからあった立派な建造物は、ほとんど流失してしまいました。お薬師様をまつていた薬師堂は、水に浮き、だんだん奥の方へ逆流していく水に乗り、現在の平谷八幡神社の上のあたりまでプカプカと浮かんでいってしまいました。

せき止められた水の量はますます増えて、現在の長安口ダムの約一・五倍もの量になってしまいました。さすがに川の流れをせき止めていた土砂も水圧に耐えられなくなり、七月二五日午後二時頃から崩れ始め、四時にはついに決壊してしまいました。

平谷でも水がひき始め、たくさんの方の家の残骸や避難させることのできなかつた牛や鶏などの亡骸が、下流へ向かって流されていきました。その時、不思議なことが起こりました。八幡神社まで流されていた薬師堂が、プカプカとり山の方へ向かって戻り始め、水がひくのに合わせて、ドンと元の位置にすわってしまいました。住職が上ノ内まで避難させていたお薬師様も、無事に再びこのお堂へ安置することができました。



▲昭和47年の繁藤災害 (提供: 共同通信社)

背景

昭和47年(1972)7月4日午後から高知県中部の山間部では断続的に強い雨となりました。このため、香美市繁藤では、1時間に95mmの豪雨を記録するなどして、5日9時までの日雨量は742mmに達しました。この大雨により、繁藤では土砂崩れが相次ぎ、ついには高さ約100m、幅約200mの大規模な山崩れが発生し、死者・行方不明者60名を出す大惨事となりました。この土砂災害では、住民の救出活動をしていた消防団員が二次災害に巻き込まれました。この後、消防の補償制度をつくるきっかけとなりました。

アクセス 繁藤災害の慰霊塔

- JR繁藤駅より北東へ直線距離約200m
- 香美市土佐山田町繁藤
- 緯度経度 北緯33度40分56秒, 東経133度41分37秒



繁藤は、豪雨が集中して降るため、古くから「雨坪」と呼ばれてきました。その雨坪で土砂災害が起こったのは昭和四七年(一九七二)七月五日のことでした。

午前六時、国鉄(現在のJR)繁藤駅前の人家の裏山がくずれました。その家で消防団員が避難作業を手伝っていた時に、再び山崩れが起こり、消防団員が生き埋めとなりました。山崩れが繰り返し起こることが心配される中、懸命の救出活動が続けられました。やっと生き埋めの消防団員の着衣が見え、ショベルカーを退避させ、手作業に移ろうとしていた矢先のことです。

午前十一時前に予想もなかった大山崩れが発生し、一瞬にして一〇万立方メートルの土砂が駅前付近を襲いました。この大災害により、一二軒の人家、停車中の列車、消防団の救出活動に駆けつけていた人々などが押し流され、死者・行方不明者は六〇人となりました。

消防団、県警、陸上自衛隊、国鉄、建設業者、医療班などが総力をあげて土砂の除去作業を行い、行方不明者の捜索を行いました。雨のため難航しました。捜索活動はその後九月下旬まで続けられましたが、全員を発見することはできませんでした。

最後の遺体が発見されたのは、半年後の翌年二月のことでした。下流の護岸工事中に発見されました。災害現場近くには遭難者のための慰霊塔が建てられています。



背景

平成16年(2004)の台風15号は、8月18日から19日にかけて東シナ海から日本海に抜けていきました。台風15号は南北に雨雲が広がったのが特徴で、四国に南から湿った空気が多量に流れ込んだため、吉野川上流域に多量の雨を降らせました。高知県大川村の小松では、8月17日の16時からの2時間に205mmの強い雨を観測するなど、3日間で総雨量1,000mm以上の記録的な豪雨を観測しました。

アクセス 小松団地

- 大川村役場のすぐ上
- 大川村小松
- 緯度経度 北緯33度47分02秒, 東経133度27分59秒



四国の山あいには、お互いに助け合う「結いの文化」が残っています。大川村では、この助け合いの文化が平成一六年(二〇〇四)の台風による被害を未然に防ぎました。

村役場近くの高台にある小松地区に住む主婦が異変に気づいたのは、土砂降りが続いていた一七日午後四時頃でした。裏山からのどす黒い濁流がコンクリート張りの水路からあふれ返り、玄関先まで迫ってくる勢いでした。生まれて初めてかいた、鼻にぐつとくる嫌なにおいが家まで入って来ました。

すぐに村役場と連絡を取り合って、避難の呼び掛けを確認しました。降りしきる雨の中、この主婦は裏山に最も近い八軒のドアを次々にたたき、「上の山が大変なことになっちゅう。すぐに役場の車が来るき準備して」と大急ぎで知らせて回りました。

この後、村の避難指示も出され、住民は着の身着のまま、バスで近くの大川中学校へ避難しました。呼びかけた主婦も車で二往復し、近所の人たちの避難に協力しました。おかげで小松地区は床下浸水の被害は出たものの、避難した二六世帯、四八人には一人のけが人も出さずに済みました。

一人暮らしのお年寄り「足が悪くてとても一人では逃げられないし、みんなに迷惑かけずに済むよう、早め早めに言うてもうて、本当にありがたいことです」と主婦の機転に感謝していました。

小さな村には、自助、共助の意識が脈々と受け継がれています。「結いの文化」が被害を未然に防ぐ上で大切な役割を果たしていることを物語っています。

昭和四〇年代以降

明治二十三年（一八九〇）、四万十川中流の四万十町窪川で起こった出来事です。
 二、三日前から降り続いた雨は、しだいに激しくなり篠つく豪雨となりました。特に四万十川上流の東津野、梶原郷は水量がものすごく、谷川は増水して氾濫し濁流は山肌をめぐり、山々の山腹から水が突き出て、山崩れが起きました。

水は谷あいや平地の家々に溢れ、近辺の田畑もみるみる水没しました。上流から根こそぎの流木が押し寄せ、牛馬が流され、遂には住家まで、ものすごい勢いで川下に流される有様でした。

しかし、夕方になると四万十川の水は急に引き始め、さらには急に止まるほどとなり、やがて西の方から陽が差し出したのです。川の水はどろ濁りでしたが、普段と少し違う程度でようやく落ち着きを取り戻していました。松葉川や西川角などでは近所の人々が道端に集まり、すさまじかった水の出方を話すなどの光景も見受けられました。

ところが、それから一、二時間たったと思われた時刻に、にわかに大音響が起きました。すさまじい山鳴りがとどろき、大激流が田畑、家屋を押し流し、その大濁流の中を人々は無我夢中で家の裏山や丘へ逃げまどい避難しました。比較的平地にある流域の集落はほとんど水没し、牛馬が流され、不意をつかれた人たちは数多くの死傷者を出しました。家もろとも家人もそのまま流され、家の草葺きの屋根の上にしがみつながら助けを求めているという悲惨な状況でした。

上流の東津野村で山崩れが起こり、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたのです。



背景

明治23年（1890）9月11日に四国地方を横断した台風は、四万十川流域に大雨をもたらしました。豪雨は流域の各地に洪水被害を招きましたが、急に水位が下がり、天候も回復してきました。人々が安心した時、大音響とともに四万十川沿いに激流が押し寄せ、大被害が発生しました。後になって分かったのですが、四万十川上流の東津野村で山崩れが起き、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、せき止めていた土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたということです。

アクセス

明治23年水害碑

- JR窪川駅より北西へ直線距離約2km
- 四万十町仕出原 高岡神社境内
- 緯度経度 北緯33度13分14秒、東経133度07分28秒





昔、音田に気立ての優しい娘がいました。娘が一八の春、河之内金比羅さんの縁日に友達と参詣に出かけました。参拝の帰り道、雨滝神社にも立ち寄りしました。娘達は湊のほとりでしばらく休憩しましたが、そのうち、娘は大切にしていた櫛を思わず湊の中に落としてしまいました。しかし、拾うことはできず、後ろ髪を引かれる思いで帰りました。

ある夜、娘の家に見知らぬ若者が櫛を持って訪れました。男は色白で面長の美青年でした。娘は大喜びで、両親も快く若者を家に入れてもてなしました。若者と娘の間にはほのかな恋が芽生え、若者は毎夜のように会いに来るようになりました。しかし、なぜか若者のまなざしは鋭く、どこか冷たく漂う妖気があることに娘は気づきました。不審に思った娘は、ある夜意を決して男の肌を傷つけました。驚いた若者は闇の中に逃げ去りました。娘はこの次第を両親に打ち明け、血の跡をたどっていくと、雨滝の湊のそばで消えていました。

その頃、娘は身ごもっていました。やがて生まれた子は、蛇の子でした。驚いた一家は、思案の末に皿ヶ森の麓に葬ってしまいました。そのことを知った雨滝の蛇の精は嘆き悲しみ、黒雲を呼んで竜となって天に昇りました。すると一天にわかにかき曇り、雲は雨を呼び、竜の口は稲妻を吐き、号泣は雷となって天地にとどろきました。豪雨は七日七晩降り続いて、皿ヶ森に地鳴りが起こり、その後山津波が山裾を襲い、人家を押しつぶしました。

人々は竜神様に一心不乱に祈願しました。すると、豪雨が止み、土砂も流れ去りました。人々は竜神様の加護を信じ、祠を建てて祈り、その悲話を後世に伝えていきます。



背景

松山自動車道で松山から高松に向かうと、桜三里パーキングエリアを越えてしばらくして左手(北側)に皿ヶ森(標高634m)が見えてきます。この付近を中央構造線が通っており、たいへん脆い岩質となっています。今から200年前、この地域を襲った豪雨により皿ヶ森の南斜面で大崩壊が発生しました。崩壊した土砂は土石流となって下流の音田の集落を飲み込み、本谷川をせき止めました。

アクセス 竜神を祀った祠

- 川内ICより北東へ直線距離約5km
- 東温市松瀬川地区
- 緯度経度 北緯33度48分53秒, 東経132度56分58秒





平成一六年（二〇〇四）の台風二一号の時、西条市の水防本部で対応に当たった人の体験談です。今まで経験したことがない大雨の中、西条市の水防本部の電話は鳴りっぱなしです。「道路が土石流で壊れて逃げ出せない」、「家の裏山から滝のように水が流れ出して、今にも山が崩壊しそうだ」、「家の前の川があふれて家の中に流れ込んでいる」などとせつば詰まった声で市民からの救援依頼が次々に飛び込んできます。未曾有の大災害です。

その中で谷の出口にある障害施設からの電話は深刻なものでした。「谷の沢水がものすごく増水している。今にも土石流が発生しそうだ。土石流に襲われたら施設の多くの入居者が犠牲になる。施設の担当者だけではどうにも避難させられない。一刻も早く助けに来て欲しい」とのこと。

「そうだ、あそこは確かに危険だ」ということで水防本部では、この電話を受けるやいなや消防団や地域の人たちにすぐに応援を求めました。そして、「土石流に襲われる前に何とかしなければ。とにかく間に合ってくれ」と天にも祈る気持ちで急いで救助に向かいました。

現場に着くと水は深いところでは、すでに胸の高さまで達しています。施設の入所者は恐怖で一様に青ざめて震えています。その人たち一人一人を背負っての危険な避難です。洪水の流れの中での避難は本当に怖く、泣き出す人が何人もいました。このような状況の中で施設の入所者に一人の犠牲者も出なかったのは奇跡としか言いようがありません。これはみんなが心を一つにして、困難に立ち向かったからだと思っています。



▲消防団による復旧作業 (提供：西条市)

背景

平成16年（2004）9月の台風21号では、愛媛県内でJR予讃線、松山自動車道、国道11号が寸断されるなど大きな被害が出ました。西条市では、鉄砲水が民家を襲い住民が亡くなったほか、土砂崩壊等により家屋、公共施設などに甚大な被害が発生しました。

アクセス

砂防施設（大浜地区）

- いよ西条ICより南東へ直線距離約1.5km
- 西条市大浜
- 緯度経度 北緯33度54分09秒，東経133度13分36秒



時は明治三二年（一八九九）、所は愛媛県の別子山村（現在の新居浜市別子山付近）でのことです。別子山村には世界でも有数の銅山があり、多くの人が働いていました。掘り出した銅を含む鉱石を溶かして銅を作る（精錬）過程では、有毒な亜硫酸ガスが発生します。そのため近くの山々の木々は枯れ、あたり一面はげ山が広がっていました。山が荒れてしまったため、人々は大雨が降ったら鉄砲水が出て、ひどいことになると口々に言っていました。

その不安が的中する日を迎えました。その日は朝から降り続いた豪雨が夜になっても止むことなく、ますます激しくなりました。はげ山となり保水機能の乏しい山肌を滝のように雨水が流れ、あちらこちらで山肌が崩れ、恐ろしい土石流となって村々を襲っていききました。別子山村の医師である高原清二郎氏は、これは多くのけが人が出ると考え、胸に浸かるほどの洪水の中を病院に急ぎました。真っ暗な中をやつとの思いで辿り着くと既に多くの人達が避難してきています。怪我をした人も多数避難してきており、真っ暗な中で人々は打ち震えていました。なんせなんの明かりもない真っ暗闇の中で、土石流や洪水が流れ下る音だけが異様な怖さを伴って聞こえてくるだけです。

これではかわいそうだと思つた高原医師は病院のどこからともなく使い古した包帯を集めてきました。そして、石油をふり掛けて火をつけるとあたり一面をパツと照らし出しました。まさに地獄に仏で、不安に打ちひしがれていた人たちの顔がすぐに輝き始めました。それとともに、明かりは後から後から避難してくる人たちのいい道しるべになりました。

背景

吉野川の支流銅山川の最上流に位置する別子山の別子銅山は、江戸時代の元禄3年（1691）に銅の採掘を開始しました。最初の坑口は新居浜市街とは反対側の南斜面にあり、「歓喜坑」と名づけられました。明治の頃はこの付近が別子銅山の中心で、採鉱と精錬が行われていました。この流域で、明治32年（1899）に土砂災害により、死者513人にのぼる大水害が発生しました。その後、採掘の中心が北斜面に移り、昭和7年（1932）に廃止することになりました。廃止にあたり開発のため伐採された森林を元の緑の森に戻すため植林が行われ、現在は鉱山の遺構は木々に覆われています。

アクセス

別子銅山遭難流亡者碑

- JR新居浜駅より南へ直線距離約3km
- 新居浜市山根町 瑞応寺境内
- 緯度経度 北緯33度55分07秒, 東経133度17分59秒





背景

平成16年(2004)9月29日に鹿児島県に上陸した台風21号は、四国を通過し、近畿、北陸、東北と日本を縦断しながら各地に被害をもたらしました。香川県内では29日午後、台風本体の雨雲がかかり始め、19時前後には観音寺市などを中心に時間雨量が60mmを超える豪雨となりました。この豪雨により県内各地で土石流などによる土砂災害が発生し、家屋や農地等に甚大な被害が出ました。しかし、死者、負傷者等の人的被害はありませんでした。この話は、当時消防団長として危険箇所の住民の避難誘導に関わった人の証言です。

アクセス 砂防堰堤群 (大野原地区)

- JR豊浜駅より東南東へ直線距離約5km
- 観音寺市大野原町萩原地区
- 緯度経度 北緯34度03分45秒, 東経133度40分27秒



平成一六年(二〇〇四)台風二一号を消防団長として経験した人の話です。土石流の危険性のあるところで生活している住民には、役場から自治会長に連絡を入れるなどして避難するよう促しました。ほとんどの住民は指示に従ってくれましたが、避難してもらえない人が一〇人くらいいました。再度、自治会長さんが連絡してくれたり、地元の消防団員が行ったりして説得したのですが、最後の一人は説得に応じようとしなないと連絡がありました。

「心配せんでもええ。この土地に何十年住んどると思うんや。ここの地形などは、わしはよう知つとるんや。お前ら下から来た者が何を言よんぞ。わしは残つて自分の家を守るんや」と、いくら説得してもだめだとのことでした。そこで、私が直接、家に行つて説得に当たりました。「言われることも、家を守りたい気持ちも本当によく分かります。でも、今度の台風はもの凄い雨を降らせませす。土石流が出たら逃げられませんで、何とか避難して頂けませんか」と一〇分か一五分くらい話しました。それでも応じてもらえないので、最後には土下座してお願いし、何とか避難していただきました。

日本全国でいろいろな災害が起きていると新聞等で見聞きしても、それはよその事で、ずっと昔から災害等のない土地なので危機意識がなかったのです。今でも実際に中位の土石流に遭った経験のある人でも危機意識は低い。この前は、ここまでで止まって被害がなかったのだから、次回もそこまでは心配ないだろうと思つている人がいるのです。

まず避難勧告を住民が守ってくれることが一番だと思います。



背景

平成16年(2004)10月19日、台風23号の接近に伴い^{あきさめ}秋雨前線が活発化して雨が降り始めました。一旦は小康^{しょうこう}状態になりましたが、20日朝から夕方にかけて台風本体の雨雲により豪雨となりました。この大雨により香川県内各地で土砂災害、河川の氾濫などの被害が発生し、死者11名、全半壊家屋405棟などの大災害となりました。この話は、土砂が牛舎に入り込み、地域の人々が埋まった牛の救出に努力するという話です。

アクセス 災害現場付近(山脇集会場)

- JR讃岐財田駅より南東へ直線距離約1km
- まんのう町山脇
- 緯度経度 北緯34度07分18秒, 東経133度49分21秒

「警報が出たけん、避難せい」そう言っても、酪農家は牛が心配なので、「おる」と言っていました。牛が家計の収入源ですから。

平成一六年(二〇〇四)台風二三号の記録的な豪雨により、かつて国有林を買収して高度成長時代にミカンを植えた農地が崩れました。その下には酪農家があり、牛舎と新築の家を構えていましたが、牛舎が土砂にやられてしまいました。

翌日、うちの自治会は六〇何戸あるのですが、全部召集して、とにかく牛を助けられないかんからと、五〇人ぐらいで、人間への危険性がない範囲でこの日にやれることはやっただけです。

かわいそうに、牛は土砂の中に四本足で埋まってるじゃないですか。腹までつかえていました。手がつけられる状態ではありませんでした。助けられないのです。小さい機械やらウンボを持ってきて、土砂をのけ、後は手作業でのけて、二時ぐらいまでかかりました。

一頭は救出したときには生きていたのですが、足が折れたとかで、残念でしたが屠殺場に送りました。鉄骨の牛舎だったので、歪^{ゆが}ただけで、壊れませんでした。鉄骨がなければ住家も被災していたと思います。住んでおられた方は、「恐ろしい、もうあないとここに住みたくない」と言っていました。



▲ 捜索活動の状況
(提供：小豆島町) ▶



背景

昭和51年（1976）9月の台風17号による集中豪雨は、香川県全域に被害をもたらしました。その中でも、小豆島町池田の四方指観測所では9月8日12時から9月13日15時までに1,400mmという1年分に匹敵する降雨量を記録しました。この豪雨により、随所で土砂災害が起こり、小豆島町池田の谷尻地区で24名の死者を出すなど、県内各地で合わせて死者50名にのぼる大災害となりました。

アクセス

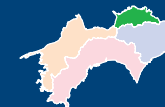
災害現場付近（砂防ダム(蒲野地区)）

- 小豆島町役場池田庁舎より南南東へ直線距離約5 km
- 小豆島町蒲野地区
- 緯度経度 北緯34度26分25秒，東経134度15分01秒

昭和五十一年（一九七六）の台風一七号の時、地区総代として土砂災害を経験した人の証言です。たたきつけるような豪雨の中で、「土石流が起こった。家がつぶされ、多くの人たちが生き埋めになっているかもしれない」との第一報が入ったのに続いて、土石流災害発生のお知らせが次々に入ってきます。小豆島の全ての沢という沢で土石流が発生してしまったのではという感じさえ受けるほどです。想像も付かない、とんでもない規模の土砂災害が発生したということだけは分かりました。しかし、各種の情報が入り乱れる中、どれだけの人達が犠牲になっているのか正確な人数さえ分かりません。とにかく行方不明者の捜索を急がなければいけません。そこで、陸海自衛隊、県警機動隊、消防団員、その他、地元自治会など各方面に緊急の協力依頼をしました。

行方不明者の捜索は困難を極めました。土石流で流れ出した大量の土砂はドロドロの状態で堆積してしまっています。そのため膝までぬかるんで、歩くのがやつとの状況です。それでも一刻も早く全員が発見されることを一心に願いながら一生懸命に捜索に取り組みました。そして、「おうい、最後の一人が見つかったぞ」という声が響いたときには、疲労困憊の中で皆が心から手を合わせました。「見つかって本当に良かった、この感慨は一生忘れることができない」と誰とはなしに口をついて出ていました。

小豆島は瀬戸内海に浮かぶ風光明媚な島で、壺井栄の小説「二十四の瞳」の舞台となったところとしても有名です。典型的な瀬戸内海気候で豪雨災害の発生など考えられない小豆島で、これだけの規模の土砂災害が起こったことは、三〇年経った今でも信じられないことです。



昭和四九年（一九七四）の台風八号の時、消防署員として、次から次へと土砂災害の悲惨な現場を目の当たりにしながら、土砂に埋まった人の救出に当たった人の証言です。

「生き埋めがおるから来てくれ！」との大声で最初に向かった現場は、たちばな橋地区の斜面に建つ住宅密集地でした。現場は上方より幅五〇メートルにわたり原型を止めず流失し全壊していました。付近一帯にガスが漂い、汚物の激臭げきしゅうが鼻を突く中、急な斜面を不明者が多くいると思われる上方を目指し駆け登りました。

ようやく私たちが辿り着いた最高所の家は半壊し、この家の上方にあった数軒の民家の残骸の一部がもたれかかっていました。地元の人々が必死に救出作業を続ける家の合間から、うめき声が聞こえました。キャップライトの光に入ったものは、土塊と化した被災者の姿でした。二畳くらいの場所に木と土砂に埋もれ二人の重傷者が出ており、その二人に重なり合うように骨折し、流血した遺体がありました。私たちは地元の人々と共に必死に救助作業を続けるとともに、無線で医師の要請ようせいをしました。

そして、私たちは息つく間もなく次の現場へ向かいました。土砂の撤去てつきよ作業を開始しましたが、根がついたままの大木と土砂に埋もれた石に、作業は難航を重ねました。しばらくして隊員の一人が水浸しの土砂の中から手指の一部を見つけ、早速発掘にかかりました。作業が進むにつれてやや横向きの遺体は徐々に全容を現しましたが、木と石にはさまれた遺体を傷つけないよう気づかい、素手での作業が主となり大変難航しました。

すぐ横で変わりはてた母親を待つ女子高生の手には真新しい毛布が用意され、取りみだすことのないその姿があまりにも痛々しく映りました。



背景

昭和49年（1974）7月6日夜、台風8号による集中豪雨が小豆島一帯を襲い、大きな被害をもたらしました。小豆島町橋地区、福田地区、岩ヶ谷地区等では死者29名、重軽傷者21名、家屋の全半壊249棟という大惨事に見舞われました。

アクセス 砂防堰堤（橋地区）

- 小豆島町役場内海庁舎より東北東へ直線距離約3 km
- 小豆島町橋
- 緯度経度 北緯34度29分28秒，東経134度20分25秒